変わる学校スポーツ

少子化が進み、子どもたちを取り巻くスポーツ環境が変化してきている。スポーツ庁からも「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」が発表され、改革が動き出している。学校におけるスポーツの在り方が、持続可能で、より現状にマッチしたものとなるような試みの一つとして、今回は運動部活動を総合型地域スポーツクラブがサポートしている長野市立東北中学校(長野県)の実例を紹介する。

イラスト／庄司 猛

連載〈第4回〉

中学校部活動を支える総合型地域スポーツクラブ

長野市立東北中学校×長野スポーツコミュニティクラブ東北

長野市の郊外にある東北中。市の中心部のベッドタウンに当たるが、少子化は止まらない

写真／成瀬 賢

子どもたちの声に応え総合型クラブが部活動支援

東北中学校では、現在、一部の運動部活動のサポートを総合型地域スポーツクラブ（総合型クラブ）である「NPO長野スポーツコミュニティクラブ東北（スポコミ東北）」が行っている。部活動の活動日数は部によってさまざまだが、長野市では日没には完全下校、朝の活動は原則禁止で、学校によって自主的な活動を認めているといった状況で、かなり活動量に制限がかけられている。そうした環境にあって、部活動をもう少し充実してほしいといった生徒や保護者の声を受け、学校側の依頼に応える形で2014年からスタートしたのがスポコミ東北による部活動支援である。

スポコミ東北はミニバスケットボールのスポーツ少年団を核に、多世代が集う形で、'00年に総合型クラブとしてスタートした。現在では10種目の定期活動を行うほか、地域と連携した各種スポーツのクリニック活動などを行っている。また、長野市北部の3つの総合型クラブの連携組織「長野市総合型地域スポーツクラブ北部連合」を設立し、長野市から依頼されたスポーツイベントなどの運営を手がけている。

部活動支援は「スポコミ東北中地域クラブ（地域クラブ）」として、それぞれの部が週3回程度、部活動終了後に活動している。部活動の生徒や指導者たちもクラブに登録してもらったうえで活動するといったように、部活動とは一線を引いている。スポコミ東北の柳見沢宏理事長は「単に部活動の強化の手段となってしまってはいけませんから、『スポーツで地域をつなげる』というわれわれのクラブ理念を理解してもらったうえで、活動してもらっています。理念を理解していただけない部活動は、やめていただいたケースもあります」と説明する。

現在、スポコミ東北がサポートしているのは、15ある東北中の部活動のなかの9部。運動部のほか文化系の吹奏楽部も含まれている。スポコミ東北による部活動支援が部活動を長時間行うための隠れみのとして捉えられ、中傷を受けることもあるため、理念の共有に力を入れている。

1つの中学では部活動を維持できない

ことし4月、東北中に赴任した加瀬浩明校長はスポコミ東北の部活動支援に期待を寄せる。「実は教員時代にも東北中で教壇に立っていましたが、校長として24年ぶりに戻ってきて驚いたのは生徒数が減っていることです。状況は把握していましたが、全校生徒が集まった様子を目の当たりにし、現実を痛感しました。1994年当時が約1100人、現在が540人ですから半減です」と少子化の現状を語る。

「このままでは部活動は成り立っていかないということをあらためて考えたのです。直面している問題として、3年生が最後の大会を終え、1、2年生主体になると、活動できなくなる部活動も出てきています。先日行われた市内の新人大会では、野球部は出場できる選手が4人しかおらず、他の中学校から部員をレンタルしてなんとか出場させてもらいましたが、その場しのぎの対応でしかありません」

そのような現状を踏まえ、将来的には部活動のすべてをスポコミ東北に委ねられないかと模索している。

「1つの中学校単位で、それぞれの部が恒常的に活動していくことが難しい時代に入ってきています。すでに人口の少ない地域では、運動部活動は1競技だけといったところもあります。これは今後さらに進んでいく問題です。今は東北中のみの部活動支援となっていますが、それを近隣の中学校とも連携していくことで、やりたい競技ができないといった問題が解消できるはずです。子どもたちにやりたいスポーツをやる場所を保障していくために、地域で活動する総合型クラブとの連携は1つの解決策となると思っています。

部活動の指導に当たりたい教員は、総合型クラブの指導者として、放課後にぜひやってもらいたい。総合型クラブとしても、さまざまな部活動の指導者を確保することは難しいでしょうから、希望する教員が積極的に指導に当たれるような環境を整えていきたいと考えています」

地域クラブで活動中の女子バスケットボール部。左端で指導するのが小林晴雄教諭

加瀬浩明校長は部活動をすべて総合型クラブに委ねる試みを推し進めている

スポコミ東北の小林和夫会長（左）と柳見沢宏理事長（右）。二人とも東北中出身で、この地域の子どもたちにできるだけスポーツの機会を提供したいと活動している

課題は多いが、今、動き出さなければ

現状の部活動支援では、保護者代表、地域クラブの指導者、部活動指導者（教員）の3人程度を指導スタッフとして、そのなかの誰かが責任者として練習にいることを内規としている。地域クラブに登録し、女子バスケットボールの指導に当たっている小林晴雄教諭は「基本的には私が出られない日は部活動支援を行っていません。自分としても無理のない範囲で活動していきます。現在は部活動の部員が地域クラブの会員とイコールになっているのですが、部活動はやれないけれど、週に数回ならやってみたいといった生徒たちを受け入れられるようにしていければ」と地域クラブの可能性を感じている。

一方でスポコミ東北の柳見沢理事長は大きな課題があるという。

「加瀬校長の期待や、考えている方向性については賛同していますが、現実には乗り越えていかなければならない課題もあります。すべての部活動を地域クラブで行ったとき、そのチームが出場できる大会はあるのか。選手や指導者にしても、練習の成果を試せる場がなければ、やる気が起きないでしょう。また、指導に当たっている教員が他校に異動した場合はどうか。理想を言えば、地域クラブで引き続き指導してもらいたいのですが、異動先で学校の部活動を指導することになれば、それも難しい。そのような周辺環境が整っていくには、まだまだ時間がかかるのではないでしょうか」

加瀬校長はそうした課題を認めたうえでこう語る。

「5年、10年後を考え、今動いていかなければならないでしょう。まずは東北中をモデル校として市の教育委員会にも認めてもらい、現在の試みを継続していけるようにしたいと思っています。そのうえで、近隣中学と連携し、関係機関と調整していきたいと考えています」

学校運動部活動の新しい形として、総合型クラブとの連携がうまく機能していくか。今後の動向を注目していきたい。SJ

※公益財団法人日本スポーツ協会発行『Sport Japan』40号より抜粋。『Sport Japan』の詳細はこちら→http://www.japan-sports.or.jp/publish/tabid852.html